

グリフィスと日本 その一

金子 忠 史

は し が ^(註1)き

^(註2)ラトガース大学（現在のRutgers-the State University）の位置するニュー・ジャージー州、
ニュー・ブルンズウィックの町中に、The Willow Grove Cemetery ^(註3)と云うアメリカ人墓地の中
に混って、その一角に荒れ果てた日本人学生や幼児の墓が、八基ばかり建っている。これらの学
生の一人、福井藩から1867年に留学生として派遣され、肺結核で卒業を前に夭折した日下部太郎
も混っている。これらの墓碑は、ラトガース大学と日本との文化交流関係を雄弁に物語るもので
ある。

〔註1〕この研究の題材となった原資料は、主として、ラトガース大学の図書館特別資料部のグリフィス・コ
レクションおよび、同大学の同じ図書館にある古記録保存部の同窓会関係および同大学教授関係の諸資料、
更に、ニュー・ブルンズウィックのオランダ改革派教会の神学校に保存されている、同派の外国伝道局本
部の日本ミッション部の資料を使用し、先に京都大学教育学部の本山幸彦助教授が、その一部を、マイク
ロ・フィルムにして、持ち帰られたものの外に、筆者が、筆写ないしは、マイクロ・フィルムおよびジ
ョックス・コピーにして持ち帰ったものである。その他、本山助教授および石附実氏が、福井で撮影され
た、マイクロ・フィルムの資料を利用して戴いた外、グリフィス自身の70余冊にわたる著作と、彼の雑
誌および新聞等に掲載した無数の論文が、題材となっている。

これらの資料の閲覧およびマイクロ撮影等で、多大な御協力並びに御教示を下されたラトガース大学の
政治学部長、Ardath W. Burks 氏、同大学図書館の特別資料部の部長 Donald A. Sinclair 氏および
係員の方々、また古記録保存部の係員の諸氏、神学校の Sage 図書館の館長の Rev. Peter N. Vanden
Berge 氏および係員の人々には、深甚なる謝意を表するとともに、福井関係資料取得で御尽力下さった本
山助教授並びに石附実氏にも、併わせて感謝致したい。

最後に、この註の始めて述べたグリフィス・コレクションについて一言するならば、一概に、グリフィス・
コレクションと云っても、資料の寄贈された時によって、また寄贈者によって、いくつかに分けられる。ま
ず、最も主要な資料は、1929年の春、グリフィスの遺言に基づいて、彼の遺族によって寄贈されたもので
あろう。これは、実に膨大な資料で、彼の著書の原稿、切抜、パンフレット、書翰類、日記、手記、日本
人学生の作文や随筆を含むものである。1960年度に、東洋関係の資料の一部が、政治学部の教授パークス
博士と彼の助手、Jerome Cooperman の手によって、24箱にまとめられたのが、それらの資料の整理の手
始めであった。これらの整理された資料については、彼らによる要を得た解説が、The Journal of Asian
Studies の二十巻、第一号（1960年11月号）および、パークス博士による、ラトガース大学図書館雑誌、
第十七巻に、「極東資料」、の題名で紹介されているので、ここでは説明を省く。

その他の未整理の資料には、東洋関係、殊に日本関係の資料が豊富にあり、未刊の原稿やスクラップ・
ブックを含めて、筆者が引出したものの外に、西欧諸国の宗教関係の資料が、未発掘のまま眠っている。

また1964年秋、カリフォルニア州、Long Beach にお住いの、グリフィスの孫娘に当る Katherine G.
M. Johnson 夫人が、グリフィス自身および、彼の姉のマーガレットの日記、手記、家族の手紙、知人や
友人の書翰および、日本におけるお雇い教師としての契約書、グリフィス姉弟の教えた日本人学生の作文
や随筆の一部等をジョンソン夫人自身の分類の下に、ラトガース大学図書館、特別資料部宛に寄贈された。
また、グリフィスの令息、Stanton Griffis 氏からも、マーガレット および モントゴメリー の日記の一部
が寄贈された。これらの資料は、当時の日米関係を知る上でも、また、グリフィス自身の研究にとっても
貴重な資料と考えられる。

これらの初期の留学生と、個人的に、家庭教師やグラマー・スクールでの教授を通じて交わりを深めていた Willim Elliot Griffis (1843~1928) は、当時、ラトガース大学に在籍していた。ラトガース大学は、アメリカ独立の十年前、即ち1766年、オランダ改革派教会によって、建設された聖職者養成の Queen's College として発足したが、経営難に陥って、Henry Rutgers の寄附金で、1825年に再復興し、19世紀中葉から、教育内容の世俗化が行なわれた。ちょうど、グリフィスが入学する一年前から、モリル法によって、理学校が設立され、この科学教育運動の波に惹かれるかのように、日本人留学生が、多数集まって来るようになった。

反面、日本は幕末以来、欧米諸列強の開国通商への圧力を加えられ、その圧力に対抗するための軍勢力および、その背景をなす経済力の拡充強化が緊急の要務となり、西洋文明に範をとった近代化政策に着手し、明治維新を契機として、全面的な社会および経済革新が、王政復古という政治改革と相俟って遂行されていった。こういった近代化政策の一環として、留学生の派遣および外国人専門家や技師を、顧問および教師として雇入れる方策が、中央政府ならびに、一部の開明的な地方政府によって、積極的に進められるようになった。

熊本の開明的で儒教的な実学者、横井小楠の二人の甥が、長崎で指導を受けた Guido Fridolin Verbeck (1830~1890) の紹介状を携えて、ニュー・ヨークにあるオランダ改革派教会の外国伝道局の John M. Ferris の世話で、ニュー・ブルンズウィックに最初に学んだのをきっかけに、日下部太郎、岩倉具視の二人の息子、即ち具定と具経、勝海舟の息子の小鹿、東京大学の初代の総理となった畠山義成、最初、文教の畑を歩きながら、後、岩手、長崎、広島等の各県知事を歴任し、貴族院議員に列せられた服部一三、神奈川の造船界で活躍した白峯駿馬、銀行家としてス

(註2) ラトガース大学は、1766年に、オランダ改革派教会によって建設された、アメリカ植民地時代で、第八番目に古い大学で、コロンビア大学の King's College に対して、Queen's College と呼ばれていた。最初は、聖職者を養成することが、主要な目的であったが、資金難で、十八世紀の末以来、二度も閉校の憂き目に逢い1825年、Henry Rutgers の寄附金に基づいて復興し、同年、別に聖職者の専門教育のための神学校が、同教会によって建設されたのを機会に、ラトガース大学と変名して、一般の市民の指導者養成の教育に重点をおくようになった。しかし、反面、神学校に卒業者を引続いて送ることも、同大学の重要な使命一つであった。以後、州政府の財政負担の比重が重くなり、1956年に、完全に州立大学として、名実ともに、ニュー・ジャージー州の管轄に入るようになり、ダグラスの女子大学を含めた、学生数3万を越える大規模な大学となっている。

cf. William H. S. Demarest: *A History of Rutgers College, 1766-1924*, New Brunswick, New Jersey, 1924.

(註3) The Willow Grove Cemetery は、1851年に、法人組織協会によって建てられたアメリカ人墓地であり、ニュー・ブルンズウィックの Morris Street に面している。その南端の一角に、1870年4月に亡くなった福井藩出身の日下部太郎を始めとして、ニュー・ジャージー州近辺で夭折した学生や幼児が8人埋葬されている。今は墓碑の約三分の二は、風雨のため倒れて、すっかり荒れ果てているが、グリフィスの *The Rutgers Graduates in Japan* の第二版(1916年)からは、次のような人名が判明する。

- 日下部太郎 越前出身、1870年4月13日、ニュー・ジャージー州、ニュー・ブルンズウィックで没、25才
- 長谷川雉郎 姫路出身、1871年11月18日、ニュー・ヨーク州、トロイで没、23才
- 松方蘇介 薩摩出身、1872年8月13日、コネチカット州、ファミングトンで没、22才
- 小幡甚三郎 小倉出身、1873年1月20日、ロング・アイランドのブルックリンで没、29才
- 入江音次郎 長州出身、1873年3月20日、ニュー・ヨーク市で没、19才
- 阪谷達三 備中出身、1886年4月14日、ニュー・ヨーク市で没、26才
- 高木三郎と高木スマの幼児、ニュー・ジャージー州、ニュー・ブルンズウィックで1877年9月5日没。

タートし、火災保険および海上運送保険会社社長となった富田鉄之助、宮内省の役人となり、男爵を授けられた多久乾一郎等、後の、日本のサブ・リーダーとなった数十人の学生が、1870年代から1880年代にかけて、この地で勉学に励んだのであった。

グリフィスは、こうした歴史的背景の下で、将来、牧師になるつもりで、ラトガース大学で多彩な学生生活を送っていた。大学卒業後、ヨーロッパ旅行を終えて、神学校で学んでいる時に、福井藩からの招聘に応じて、お雇教師として日本へ行くことになった。福井の明新館で、1871年に、物理、化学を正規の学科として教え、1872年から1874年にかけて、中央政府のお雇い教師として、大学南校で教鞭をとり、その間、彼の福井の後任として、Martin Nevius Wyckoff と Edward Hutchinson Mudgett を送り、1872年には、自分の姉、Margaret Quandril Clark Griffis を東京に呼び、官立の最初の女学校である、通称竹橋女学校と呼ばれた東京女学校で、女子の教育に専念させた。また勝海舟の求めに応じて、無二の親友、Edward Warren Clark を静岡洋学校（伝習所）の化学および物理の教授として送ったのであった。

ラトガース大学からは、グリフィスの先駆者として、駐日米弁理公使の Robert H. Pruyn、宣教師として、James Hamilton Ballagh および Henry Stout などが、早くから日本へ来て活動していた。特にこれら宣教師は、布教活動と並んで、教育活動にも従事し、近代化政策に、直接的にも、間接的にも貢献したのであった。

例えば、バラは、James Curtis Hepburn および Samuel Robbins Brown らと協力して、築地大学校、後に明治学院の設立および教育活動に貢献しており、同じ、ラトガース大学の後進であり、宣教師であった Howard Harris 等、明治学院で教鞭をとった者も、数人数えられる。また、オランダ改革派教会の長崎ミッションで活躍していた Henry Stout (1838~1912) は、しばらくの間、長崎の官立英語学校で教えていたが、辞して、1881年に、東山学院 (Steele Academy) および、スタージ神学校 (The Jonathan Sturges Seminary) を設立した。前者は、同じくラトガース大学出身の宣教師、Eugene Samuel Booth が、創始した学校を発展させたものである。後者は、主として神学を教え、日本人のキリスト教神学者の養成を企図したものであった。ブースは、後、フェリス和英女学校に呼ばれ、横浜に行った。同校の校長、Mary Miller 夫人（もと、Miss Mary Kidder）の転任に伴ない、校長に任命され、40年間（1882~1922）、女子の高等教育に尽力した。これらの宣教師たちは、私立の、キリスト教の普及を目的とした高等教育機関の創設および発展に、大きな功績を残している。また、グリフィス在日中には、ラトガース大学の恩師、David Murray (1830~1905) が、岩倉欧米使節団と、米国ワシントン駐在の少弁務使であった森有礼の銓衡を経て、フェルベック（在日当時、フルベッキとも呼ばれた）やフェリスの推薦で、田中文部大輔の下で、文部省の最高顧問として来日した。彼の在日中、文教政策一般に関する助言をなし、漸進主義的な改革を主張し、国民性に適した教育制度の創設を説き、女子教育の振興、師範学校教育の導入、東京大学の組織化および学士院の設立に大きな貢献をなしたのみならず、1876年、フィラデルフィアで開かれた米国独立百年記念万国博覧会に、

日本の教育関係の出品をなして、紹介に努めたのであった。彼は、日本に六年間滞在して、明治12年の教育令制定の直前に任期満了で、アメリカに帰った。

このように、ラトガース大学およびその付属校たるグラマー・スクールは、幕末から明治初期にかけて、日本人留学生のメッカとなり、後の日本の各界のサブ・リーダーを養成したのみならず、他方、同大学の卒業生や教師たちは、お雇いおよび宣教師として来日し、近代化政策の脇役として活躍したのであった。特にフランスの制度を採り入れ、アングロ・サクソンの功利主義思想で粉飾された、明治5年の学制の発布から、明治18年、森有礼が、文相就任後、プロシヤ的な制度や方針に転換する過渡期において、教育の分野で、アメリカの影響の最も強い中で、特にラトガース大学の影響の支配的地位は、否定できないであろう。

グリフィスは、在日四年間、お雇い教師として、また、フェルベックとともに、文教政策の顧問および助言者として活躍した。彼の教え子から、後の日露戦争の講和条約締結に際し、外交官として活躍した小村寿太郎および高平小五郎等が輩出している。かくして、グリフィスは、任期満了前、1874年夏、姉の病氣保養の理由で、早目に帰国した。帰国後は、ニュー・ヨークのユニオン・カレッジに入学し、牧師になるための修業を積んだ。1877年に僧職を受けて、スケネクタディの改革派教会の牧師を振り出しに、1886年には、ボストンのショームト組合教会に転出し、1903年には、ニュー・ヨーク州のイサカの第一組合教会の牧師として活躍した。牧師としての布教活動の傍ら、講演や著作や新聞および雑誌への寄稿等を通じて、精力的に日本紹介を行なった。彼の著作で最も有名なものは、1876年に初版が発行され、1912年の十二版まで、百万部を超える発行部数を出したと云われる「皇国」(The Mikado's Empire)であろう。彼の約70冊におよぶ著書の中、ほぼ半数は、日本関係のもので、広く歴史、宗教、政治、経済、外交、社会、文化、教育および風俗等の範囲にわたって紹介を行ない、いわば、一世紀前に、日本のエッセイ・スタディを手始めたと云っても過言ではあるまい。

1926年から1927年にかけて、国民新聞社の徳富猪一郎、財界の大立物、渋沢栄一、および福井市長の永井環らの招待で、日本を再訪問し、各地の講演にひっぱり廻され、朝鮮および南満州まで遠征する势力的な遊説旅行を行ない、日本文化の再評価を行なったのであった。

以上のように、グリフィスの日本滞在は、他のラトガース大学出身者と比べて、短期間ではあったが、日本との関係は、実に彼の一生涯にわたったのである。1908年に、明治天皇は、彼の日本における功績を表彰して、旭日勲章第四等を、更に、1926年、グリフィスが日本を再訪問した際に、今上天皇は、彼に旭日勲章第三等を下賜したのであった。

したがって、本論文は、グリフィスの一生涯の活動にわたって、彼の成長と渡日の動機、日本における教育活動および、帰米後の、彼の日本文明紹介および評価といった三つの面を論究し、最初に彼の眼に映じた日本のイメージ、日本へ行くことに決心した動機ならびに教育意図、日本における教育活動の意義、および日本の近代化におよぼした役割、彼の日本文明の紹介と解釈を通じてみられる、彼の日本文明に対するイメージおよび評価の変遷、および再訪日後の日本文明

の再評価といった諸点を明らかにしてみたいと思う。

紙数の関係で、本稿は三部作の中の最初の稿を掲載するにとどめた。次回は、グリフィスの福井および東京における活動、最終回には、グリフィスの著作や講演等を通じてみた日本文化の評価ならびに再評価を掲載する予定にしている。

第一章 グリフィスの成長と渡日の動機

ウィリアム・エリオット・グリフィスは、1843年9月17日、フィラデルフィア市で、両親ともイングランド系である家庭の第四子として生を受けた。父、John Lineburner Griffis は石炭商人で、遠くヨーロッパやアフリカや中国やフィリピン等を船で乗り廻して、広い世界的な視野と豊かな経験を持っていた。然し、結婚後は、海外に出る機会も少なく、ハドソン河とラリタン河を、新しい蒸気エンジンのついた小船で往復する小規模な事業を、営んでいるにすぎなかった。ウィリアムが七才の時、父は彼をデラウェア河にある石炭積み出しの波止場に連れて行き、後のペリー提督、日本遠征の旗艦となった *Susquehanna* 号の進水式を見せたのであった。時は、1850年4月6日の事であった。^(註4) この事は、グリフィスが、後に日本に対して興味を持つに至ったきっかけの一つとなった。

彼の母、Anna Maria Griffis は、敬虔なキリスト教信者で、フィラデルフィアにある、John Chambers (1797~1875) の第一独立長老派教会において、若い婦人たちのためのバイブル・クラスや幼児保育園で、多年の間、教えていた。彼女は、しばしば、ラトガース・カレッジの卒業式に列席する機会を持ち、秘かに自分の息子を一人でも、ラトガース大学に入れて、牧師にさせたいと云う希望を抱いていた。^(註5)

彼の長姉に当たるマーガレットは、彼の最も情愛深い姉であり、ヨーロッパ旅行および日本滞在中は、もちろんの事、彼女の生涯を通じて、彼の面倒を見、かつ激励したのであった。彼女もまた、チャムバースの教会付属の日曜学校および私立の女学校で教鞭をとっていた。病身の母親や幼ない弟や妹たちの面倒を見るのは、彼女の役目であった。

ウィリアムの兄、モントゴメリーは、フィラデルフィアの中央高等学校を中退して、1856年3月には、商船に乗りこんで、父親と同様、世界各地を船で乗り廻していた。1860年8月に、アメリカ海軍に入り、南北戦争の内乱時代に、北軍の海軍技師として働らいていた。他に、中学校の教師になった Mary と云う妹、同じく、学校の教師になり、文学や演劇に興味を持って活躍していた姉の Martha および、弟の Clarence と、夭折した弟が、外に一人いた。

このように、ウィリアムは、兄弟に恵まれていたが、主として、彼の父および兄によって、広

(註4) W. E. Griffis: *The Mikado's Empire*, New York, Harper & Brothers Publishers. 11 th ed. 1906, p. 677

(註5) W. E. Griffis: "Intimate Glimpse" *Rutgers Alumni Quarterly*, Vol. 2, No. 3, 1916, April, p. 134.

く世界を見る目を養なわれ、外国に関心を持つに至ったのであり、また、他方、彼の母および、マーガレットによって、内的な宗教生活に覚醒し、殊に姉から、事物を観察する習慣、観察した事物を表現する能力を、植えつけられたのであった。

1858年2月、彼の父は、火事による事務所の焼失と、南北戦争に伴った経済不況が、たたって、事業に失敗し、家族の全財産を、ほとんど売りつくすことを余儀なくされ、貧困と病気に悩んでいた。最もひんぱんに、家族は住居を変え、ついには、しばらくの間、お互いに別れて生活をしなければならぬ有様であった。姉のマーガレットは、しばしば、住み込みの家庭教師として、外に出なければならなかったし、次姉のマーサも、学校の教師として働いた。ウィリアム自身も、フィラデルフィア中央高等学校を中退して、Carrow Thibault 宝石会社に、22才まで徒弟として、働らきに出た。宝石をけずったり、切ったり、磨いたりして、指輪や装身具をこしらえることが、彼の割り当てられた仕事であった。この仕事によって、「宝石や金属や人間性について、また使用者と従業員について、手短かに云えば、実際的な形で『労働問題』について学んだのであった。」^(註6)

彼らの、このような不幸な日常生活から、精神的に彼らを救い、支えたものは、彼らの強い宗教的な信仰であった。毎日曜日、彼らは、チャムバースの第一独立長老派教会に通い、礼拝、祈祷会、宣教師集会、バイブル・クラスや日曜学校に出席した。ウィリアム自身も、少年時代には、同教会付属の日曜学校に通い、後には、そこで教鞭をとっている。彼は教会関係や近隣の友人たちとともに、一時、ウェブスター文芸協会を結成し、詩を書いたり、物語を読んだり、また、Shakespeare Lyceum に加入して、演劇を催したり、活発に活躍していた。他方、Y. M. C. A. の図書館に通って、英語古典や一般文学書に親しんだり、あるいは日曜学校の月刊誌 Our Messenger に散文や詩を載せたりして、文学的な趣味を培っていた。

しかし、ウィリアムの青年時代に、最も強い影響を与えたのは、チャムバースの長老派教会とタルメージのオランダ改革派教会であった。John Chambers は、スコット・アイルランド系の長老派教会の牧師で、その発らつたる精神、人好きのする声と容貌、たくましいエネルギーと確信は、人を惹きつけるものがあつた。彼は、宗教というものは、それが、すみやかに、かつ、永遠に、神聖なる生活および魂に対する働らきかけと云う点で、実を結ぶためには、実践的なものでなければならないと考えていた。彼は、厳格な日曜礼拝主義者で、彼の教会に参加している全家族に、毎日曜日、時間を厳守して、厳重に出席することを要求したのであつた。彼は、また、青年教育、特に青年節制協会(The Young Temperance Society)や日曜学校に関心を持っていた。彼は節制運動の会合に参加することに多くの時間を費し、多くの場所を訪れて、青年たちを、常に活発な福音活動や近隣の祈祷会に、忙しく立ち廻らせていた。しかし、グリフィスは、チャムバースの、「奴隷制度を、神聖にして、かつ、安全に守られるべき、アメリカの制度とし

(註6) W. E. Griffis: *Sunny Memories of Three Pastorates*, Ithaca, N. Y. 1903, p. 4.

て、維持し、かつ保護することに、全面的に賛成する。^(註7)と云う主張に、同意できなかった。南北戦争の間、1861年の4月から9月にかけて、ペンシルヴァニアのズアーベ士官候補生(The Pennsylvania Zouave Cadets)に加入し、更に1863年の7月3日から、8月28日まで、ペンシルヴァニア市民軍第四十四聯隊(the 44th Regiment of the Pennsylvania Militia)で、兵役に服したことがあった。リー將軍の軍隊が、ペンシルヴァニア州に進駐した1863年6月に、グリフィスは、直ちに第四十四聯隊に編入し、家を出る前に、チャムバースにお別れの挨拶をしに行った。彼はチャムバースから祝福を受けるものと期待していたのにもかかわらず、反乱軍を征服することの不可能なることを説教されて失望したことがあった。^(註8)

このことが契機となって、グリフィスは、オランダ改革派教会のタルメージ教会に、次第に惹かれていくようになる。この教会で、Thomas De Witt Talmage (1832~1902)の連邦政府の人種平等の主張に対する愛国的な忠誠心に感動し、John Van Nest Talmage (1819~1892)の中国の厦門における現実的な経験および、彼の冒険心に基礎をおく、極めて魅力的な、かつ印象的な説教に聴き惚れ、ラトガース大学総長、William Henry Campbell (1808~1890)の説得的な説教に感激したのであった。グリフィスが、キャンプ総長の、「もし、何人も私の弟子になるならば、彼に十字架を担わせ、かつ、私の後を追わせよ。」と云うテキストについての説教を聴き、深く共鳴したのは、1863年5月24日であった。これらの説教から、グリフィスは、良心の声、すなわち、神の御召しを、はっきりと、あたかも電光赤火の如く、燦然と聞き取ったのであった。^(註9)別言するならば、そのような絶えざる宗教的な雰囲気を通じて、牧師になるための勉強をし、福音を異教徒や異教の国々に伝えるべきだという、強い義務感並びに使命感を持つに至った。

他方、グリフィスは、1860年6月9日、最初の日本の使節一行を、フィラデルフィア市のチェスナット街で拝見した。この一行は、云うまでもなく、1858年に、Townsend Harrisと徳川幕府が結んだ日米修好通商条約の批准書を交換するために、井伊掃部頭によって派遣されたものである。姉のマーガレットの日記には、この事件について、次のように描写している。

「1860年6月9日 土曜日 現在、私たちの町を訪問している日本人をお祝いするパレードに行ってきたので、全く疲れてしまった。彼らは、アメリカに二週間ばかり滞在しており、ワシントンやボルチモアを訪れて、今、この地に滞在している。ここでは、彼らは最大の注目を浴びており、私たちの市の、すべての軍隊や高官の人たちによって、駅まで護衛された。ウォルナットとチェスナット街交叉点には、多くの群衆が居た。Willie (W. E. Griffis) と Anna Maria Elliot (彼らのいとこ) が、私と一緒に見ていた。日本人一行は、コンティネンタル・

(註7) W. E. Griffis: *John Chambers, Servant of Christ and Master of Hearts and his Ministry in Philadelphia*, Ithaca, N. Y. Andrus & Church, 1903, p. 111.

(註8) Ibid. p. 119.

(註9) W. E. Griffis: *Sunny Memories of Three Pastorates*, p. 5.

ホテルに泊まり、そこでは、76人（ママ）から成る随員のために、優雅なアパートが提供された。三人のプリンス、召使、医者、通訳等に、私は何度か、他の人たちとともにお辞儀をした。そして日本人一行は、そういった状景全体に、一見、ひどく喜んだ様子で、私たちのお辞儀に答礼したのであった。私たちの話題は、日本人のことで、もちきりでしたし、ここしばらくは、当分続くことでしょう。^(註10)……」

マーガレットとウィリアムは、その翌日にも、チեսナット街で、随員の幾人かに会っており、ウィリアムは、後に、その一行の事について、「皇国」の第十一版の中で、次のように書いている。

「……日本人の風流な衣裳や、刀に施された巧妙な細工に印象づけられたが、しかし、わけでも、彼らの洗練された動作に印象づけられた。……最初から、私は、日本人を、真面目に受け入れた。多くの点で、彼らはわれわれと同じであるが、他の点では、彼らは、われわれよりも優れているように思われた。^(註11)」

この事件は、確かに、日本についての理解と認識を深めるのに役立った。その上、彼は、オランダ改革派教会によって後援された宣教師大会に参加することによって、日本での宣教活動に関する情報も、折にふれて得ていた。^(註12)

1863年11月26日付けの、グリフィスの姉宛の手紙によると、デ・ウィット・タルメージが、彼に何度も、オランダ改革派教会に参画するように懇請しており、グリフィスも、この頃、福音を伝える牧師になることを決心したように思われる。そして、タルメージ教会の教団は、グリフィスが牧師になるために、修学中は、彼の全費用を貸与することを約束したのであった。遂に、1864年3月2日に、彼は、第二オランダ改革派教会のメンバーに選ばれた。この事が、また、彼のラトガス大学進学を決定づけた。事実、彼は、1864年3月から、1865年6月まで、デ・ウィット・タルメージの世話で、George Young の下で、個人教授を受け、大学入学のための準備教育に従事していた。日中、宝石会社で働いた後、夜間および週末に、一生懸命、勉強していた。ラテン語、算術、地理学などの既習の科目の復習と、ギリシャ語や数学の勉強を新たに始めなければならなかった。

1865年9月20日に、彼は難なく、ラトガス・カレッジの入学試験にパスして、理科コースに入学を許可された。その当時、ラトガス・カレッジのカリキュラムは、ほとんど純粹に、文科的な、また、アカデミックなものであった。しかしながら、1863年に、キャンプベルが、ラトガー

(註10) Margaret C. Griffis: MSS. Diary, 1858-1860, G. C., RUL (以下, Griffis Collection, Rutgers-the State University Library の省略とする。)

(註11) W. E. Griffis: *The Mikado's Empire*, p. 677.

(註12) オランダ改革派教会は、American Board と協力して、1832年に、外国伝道局 (The Board of Foreign Mission) を組織して以来、早くから宣教師を、極東方面、特に中国に送っていた。1858年に、徳川幕府が、欧米諸国と通商条約を結び、開国に方針をふみ切った時に、オランダ改革派教会は、翌年、最初の宣教師3人、即ち、フェルベック、ブラウンおよび Duane B. Simmons を横浜と長崎に派遣し、米国長老派教会、米国監督派教会、カトリック教会、ギリシャ正教会とともに、日本宣教活動に先鞭をつけたのであった。

ス大学の総長に就任した当時、George H. Cook と云う自然科学の教授が在職しており、科学教育を前進的に採り入れることに、大いに貢献していた。キャムベルは更に、この科学教育運動および、教育内容の世俗化運動を推進したのであった。数学の教授、Marshall Henshaw の後任に、ニュー・ヨーク州、アルバニーにある、アルバニー・アカデミーで、キャムベルの部下であったジョージ・クックの跡を継いで、同校の校長になったデーヴィッド・マレー（1830～1905、在日当時、モルレーと呼ばれた。）を、1863年にラトガース大学に呼び、数学および天文学の教授を担当させた。また、もう一つ、この運動の決定的な要素は、1862年に議会を通過したモリル法と称するランド・グラント・カレッジ設立に関する法律に基づいて、ラトガース大学でも、1864年に、キャムベルの指導の下に、農業、工学および化学のカリキュラムを持った、ラトガース理学校（The Rutgers Scientific School）を組織したことであった。この理学校は、この法律に基づいて、ニュー・ジャージー州に属することになり、この手段は、ラトガース・カレッジを単なる私立の大学から、州立の教育機関へ移行する第一歩であった。かくして、キャムベル総長は、新しい学校の教授陣を組織し、かつ、オランダ改革派教会およびニュー・ジャージー州の両者から、財政的な援助を仰ぐことで忙しかった。

こうした新しい科学教育運動の波に乗りかけていたラトガース大学で、グリフィスは、その理科コースに籍をおいたのであった。彼が牧師になるために、なぜ、理科コースを選んだかは、定かでないが、彼が入学前に、宝石会社の徒弟として働らいており、その実地経験に、自らその理論的な基礎知識を求めたとも受け取れる。別言するならば、彼は疑いもなく、科学的な知識を含めて、広い範囲の題材に精通することを望んでいたとも云える。この事は、後の彼の多方面にわたる関心と教養の基礎になったことは否定できない。

大学に入るや、彼は、オランダ改革派教会から、教育委員会資金（The Board of Education Fund）を奨学金の形で貸与されて、その不足額を、教会の日曜学校での教授料、例の宝石会社の指輪の注文販売の斡旋料や、彼の二人の姉、マーガレットおよびマーサからの、時折りの仕送りで賄っていた。ニュー・ブルンズウィックでは、神学校礼拝堂で行なわれたキャムベル総長の説教を欠かさず聴き、オランダ改革派教会のバイブル朗読会に出席し、単にオランダ改革派教会のみならず、長老派教会、監督派教会およびメソジスト教会の礼拝式にも積極的に参画して、自己の精神的・宗教的練磨を積んだ。

また、大学の学生として、いろいろな種類の活動に従事した。大学入学直後、フィロクリーン文芸協会^(註13)に参加し、翌年は、そのグループの指導的なメンバーの一員になっている。また、社交と親睦を目的とした男子学生クラブ（fraternity）^(註14)の一つであるデルタ・イプシロンに、1866年

（註13）フィロクリーン文芸協会（the Philoclean Literary Society）は、ペイトソフィアン協会（the Peithesophian Society）と並んで、フィロとペイトと呼びならわされているラトガース大学の二大文芸協会^(註14)で、いずれも、1825年に創設された。その起源は、遙か植民地時代にあり、革命の混乱期にも存続し続けた。Van Nest Hall は、それら両協会のホームとなっている。

に入会し、各種の文化活動を積極的に企画かつ指導して、多様な経験を積んだのであった。

彼のカレッジ時代におけるアカデミックな活動を見てみることにしよう。幸運なことに彼は多くの優れた教師に恵まれた。彼は、次のようなコースをとっている。大学在学中、丸四年間、数学関係の諸科目、即ち、数学、算術、幾何学、三角法、天文学を、マレーに師事し、最も深い感化を受けており、兩人の師弟愛は、後の日本での活躍および、一生を通じて結ばれることになった。クックからは、化学、物理学および植物学を学び、キャムベル総長からは、特にヘブライ語の個人指導を受け、旧約聖書の読書会に出席した。その外、De Witt Ten Broeck Reiley のラテン語、David Cole や Jacob Cooper のギリシャ語や哲学、T. Sandford Doolittle の修辭学、美学および哲学、Gustavus Fischer のドイツ語、およびフランス語等、専門の理数科系統の学科目の外に、極めて豊富な語学上の訓練を受け、文科系統の学科目に親しんでいた。グリフィスは、彼の教師たちを、次のように想起している。

「文学と雄弁術の、『若きナポレオン』、ドウリットルおよび、科学の完べきな教授クックは、私の知性を最も肥沃なものにした。マレーは、健全な判断と、無情なほどの誠実さに秀でていた。幾何学の試験の後で、私をかつていさめたことがあった。私は、カンニングをして満点をとっている奴を見かけて不愉快な気持ちになって、教室を立ち去ったからであった。私は、マレーを高く尊敬している。そして、大学において、また、私たちが、数年間、共に働いた日本において、私は彼のなした高貴な仕事の故に、ラトガース大学を誇りに思っている。……George W. Atherton は、手広く私に歴史哲学を教え、人類の統治は、諸科学の最高のものと、美術の最も美しきものとの間に属していることを示したのであった。レイリーは、私にとっては、ラテン語を生ける言葉にし、ローマ人を現実の人間たらしめ、歴史を美観たらしめた。コールは、立派な学校教師であった。しかし、クーパーの下では、ギリシャ語は生と喜びであった。^(註15)……キャムベル博士は、総長であり、日曜の朝の時間には、新約聖書を輝かしいものにした。」

グリフィスは、常に優れた学生の中の一人であり、すべての教授たちに愛された。彼の級友たちは、彼が年上であることと、学識経験に富み、指導力を有するということから、彼を尊敬して

(註14) 男子学生クラブを fraternity と称し、女子のそれを sorority と云う。これらのクラブは、社会的あるいは専門的な共通な関心事を中心として結成され、寝食を共にする寄宿舎を持つこともあれば、そうでない事もある。通常、ギリシャ文字の頭文字で名称がつけられ、全米的な組織を有している。大抵カレッジや大学を単位に結成され、社会的・教育的なもの、専門職的なもの、名誉的なものの、約3種に分けられるだろう。社会的・教育的なものは、ほとんど、いずれの大学やカレッジにも設けられ、大学入学者の中から、志望者を選抜して集団生活を組織し、人格の発展と社会的な能力を特に強調する。本質的には排他的な、自給自営的なクラブである。社交と娯楽で親睦を固め、参加者の役割を厳格に決め、規律正しい生活を送ることが主眼となっている。時には休暇を利用して、社会奉仕に出かけたり、ピース・コープ的な仕事に参加することもある。専門職的なものは、専門職業教育の特殊な分野に学生を限定し、その分野における専門職の能力や業績を促進することを目的とし、大学の学部や学科を中心に組織されることが多い。最後に名誉的なものは、ある種の学問的な、科学的な標準、あるいは、時には、社会的な標準を充たすことによって、学生が参画の資格を与えられるクラブで、例えば、ファイ・ベータ・カッパのように、学業成績優秀な学生のみが、会員として勧誘されるクラブがある。

cf. Carter V. Good (ed.) *Dictionary of Education*, McGraw Hill Book Company Inc. 1959.

(註15) W. E. Griffis: "Intimate Glimpse" pp. 134-139.

いた。マレー、レイリー、ドゥリットルの各教授およびキャムベル総長は、彼を個人的に、いろいろと面倒を見た。

グリフィスが、マレー教授に、一年間だけ彼の課程を短縮したいと云う計画を示した時、教授は、カレッジの全コースを受けて、それから神学校の中級に入る方が、ずっと良いと云うことを説いて聞かせた。また、彼の生計の資を援助するために、教授たちによって、いくつかの仕事が彼に割り当てられた。たとえば、1868年9月の初め、ラトガース・グラマー・スクールの校長を併任していた、レイリー教授の勧めで、同校でラテン語およびギリシヤ語を教え始めている。このグラマー・スクールでの教授の経験は、彼をして、同校に学んでいた日本人学生との接触の機会を多く持つ要因となったことも否定できない。

彼が、当地では、最初の日本人留学生、横井左平太と横井太平に会ったのは、1866年9月20日頃であったと推定される。彼らは長崎で、フェルベックの指導を受けた後、伊勢佐太郎および沼川三郎の変名で、肥後藩から脱藩の形で、1866年6月10日の日付けの、フェルベックの紹介状を持って、ニュー・ヨーク市のフルトン街103番地にあった、外国伝道局の本部で、書記をやっていた、ジョン・M・フェリスの所へやって来て、彼の親切な斡旋で、ニュー・ブルンズウィックの下宿に落ち着くことができ、ラトガース・グラマー・スクールで、英語教育を受けることになった。^(註16)

この事が機縁となって、オランダ改革派教会の外国伝道局は、宣教師たちの、日本での教育活動と並んで、積極的に日本人学生を留学生として、米国等に派遣し、彼らの一人でも多くの者を啓発することによって、当時の日本での、キリスト教禁令の高札を一刻も早く取り除き、キリストの福音を全日本人に普及すべきであると云う、フェルベックの^(註17)意図を汲んで、進んで多くの日本人留学生を受け容れ、在米教育機関に紹介の労をとったのであった。

フェルベックに紹介されて、ニュー・ブルンズウィックの地にやって来た日本人学生は、1870年代でも、数十人を数えるが、その中で、ラトガース・グラマー・スクールから、正式にラトガース大学の課程に入った最初の日本人学生は、福井藩から派遣された日下部太郎であった。彼は1867年7月13日に、ニュー・ヨークに着き、同じく外国伝道局を通じて、ニュー・ブルンズウィックに紹介されている。彼は同地で、横井兄弟と交友を深め、当時、大学の学生であったグリフィスの個人教授を受け、ラテン語を勉強した。^(註18)

日下部は大学における成績は、抜群で、普通四年かかる課程を三年で終えるばかりになっていたが、惜しいかな、肺結核で、卒業の二カ月前に亡くなった。時は、1870年4月13日で、グリフィスは、同月15日の葬式に列席し、丁重に弔った。^(註19)

(註16) W. E. Griffis: *Rutgers Graduates in Japan*, New Brunswick, N.J., Rutgers College Publications, 1916, p. 33.

(註17) Letter from G. F. Verbeck to J. M. Ferris, May 4, 1868. Box 747, 3 New Brunswick, Theological Seminary (以下 N. B. T. S. と省略す)

(註18) W. E. Griffis: *M. S. S. Diary*, October 30, 1868, G. C. RUL,

(註19) W. E. Griffis, *M. S. S. Diary*, April 13 & 15, 1870, G. C. RUL.

ラトガース大学は、日下部を卒業生の名簿に入れ、名誉的な男子学生クラブの一つである、ファイ・ベータ・カップに推薦して、黄金の鍵を贈呈した。この事は、グリフィスをして大いに感激させ、「日本人というものが、このように優れた頭脳を持っているものならぜひ行って教えてみよう^(註20)と決心するに至った。」

このファイ・ベータ・カップの黄金の鍵は、グリフィスが訪日決定の際に託され、福井に居た日下部の両親に手渡すことを要請された。

このように、グリフィスは、日本人学生と直接の接触があった外、日本および日本文化に関する知識や間接的な情報を得る別の機会を多く持っていた。一つは前述した宣教師大会に出席して、日本宣教師部の報告を、しばしば聴くことによって、日本に対するイメージを抱くようになった。また他の機会は、彼の級友の一人、Robert Clarence Pruyn と懇意にしており、ニューヨーク州アルバニーの彼の家を、時々訪れて、彼の父であり、かつ、ハリスについて、アメリカの初期の駐日弁理公使であったロバート・H・プリュインに紹介され、日本についての情報を得たり、プリュイン父子が持ち帰った日本の民芸品になじむ機会を持ったことであった。

かくして、グリフィスは、大学時代に日本人学生との交わりを深める一方、学生としての本分を、遺憾なく発揮した。彼の同級生である1869年度卒の級友たちは、いろいろな分野において活発であった。グリフィスは弁説も筆も達者だったので、毎学年行なわれる賞金づきの作文弁論大会には、幾度か賞を獲得し、また、ロバート・プリュインとの共同発意で、カレッジの機関誌ターグム^(註21)の月刊発行の計画を立案し、1869年1月に、最初の月刊号を発行している。

スポーツの分野においても、フット・ボールが早くから学生の間で人気があり、アメリカで最初のカレッジ対抗フット・ボールの試合を、1869年秋に、プリンストン大学と行なった。またラトガース・カレッジのカレッジ・カラーを紅色に決めたのも、1869年5月のこと^(註22)であった。

1869年5月25日の午後、学級教練会(class exercise)が、「学級の木」(class tree)と呼び馴染んでいた木の下で行なわれた。その際にグリフィスは、演説をなし、二つの点を論じた。第一点は、学生は十分に準備がなされる限り、公的な生活に入るのが、如何に遅くならうと気にする必要はないと主張した。彼自身、大学に入ったのも22才の年で、同級生より4年年長であった。アメリカのカレッジや大学が、現今に至るも、入学は容易だが、進級および卒業が困難である事を考えてみるときに、グリフィスのこの主張の中にも、すでにカレッジや大学において、公

(註20) 齊藤静「グリフィス博士」(我等の郷土と歴史)福井関係資料、マイクロ・フィルム・コピーより。

(註21) ターグム(The Targum)は、今日も連綿として続いているラトガース大学の学園誌で、1週5日発行されている。この学園誌は、1841年1月に、ラトガース文芸雑録(The Rutgers Literary Miscellany)として発足したが、その端緒であったが、余り長続きせずに終っている。1858年4月から1861年4月まで、ラトガース・カレッジ季刊誌として復活出版されたが、不評を買い廃刊のやむなきに至っている。1867年に、キャンプ総長の下で、ヘブライ語の授業を受けていた三回生および四回生の学生たちが、ターグムという名前をつけて、学園誌を年1回発刊することになった。グリフィスとプリュインは、これを月刊発行に切り換え、ターグムの学園誌としての地盤を築いたのであった。

(註22) W. H. S. Demarest: A History of Rutgers College, Rutgers College, New Brunswick, N. J. 1924, p. 424.

的な社会生活への十分な準備と実力を与えるべきだと云う高等教育の理念が伝統的に培かわれつつあった一面を見ることができる。

第二点は、女子教育に関して、女子は、彼らの兄弟と等しい教育および文化施設を持つべきであると強調し、次のように述べている。

「1869年卒の兄弟たちよ、わが国は南北戦争における統一のための偉大な斗いを経た後、新しい発展の時期にさしかかっている。われわれは大きな国家的な拡張の門出に立っている。そして、われわれの地平線は無限に広がっているように思われる。しかも、われわれ男子青年たちは、機会を持ち、未来は、より広汎な労働を必要としている。次の呼び声に耳を傾けよう。

……過去から受け継いだ遺産と将来の見込みについて、われわれの姉妹たちは、その幾らかでも分け持っているだろうか。即ち、人類の半分にあたる女性が、どうしてこれらを分け持ていけないだろうか。われわれ男性を導く開かれた扉を、どうして女性に開いてならないだろうか。女子教育が、男子の高等教育に施されているものと平行して、前進し続ける若干の希望がすでにある。ヴァーサール女学院は開設され、三年生はすでに、卒業してしまっている。

確かに、そのようなカレッジは、ニュー・ブルンズウィックのこの地にも設立されてしかるべきである。……ラリタン河畔のこの都市から、生活の諸問題および国民の将来の仕事と取組むことにおいて、彼らの兄弟たちを援助するために、知的な訓練と豊かな教養によって、資格づけられた女性群が進出すべきである。」^(註23)

後のニュー・ジャージー女子大学（現在のラトガース大学付属、ダグラス・カレッジ^(註24)）設立の理念が、1869年に、すでに早くも、グリフィスによって提案されていた。

彼の女子高等教育の理念は、彼の母が、チャムバースの教会で、若い婦人たちのために、バイブル・クラスで教えているのを見かけたと云う事実によって、大きく影響されたと云える。いわゆるキリスト教の博愛主義の理念に基づいて、男女両性に教育の機会を均等に保障すべきだと云う彼のこの主張は、日本にあっても、彼の姉を東京に呼んで、竹橋女学校で教鞭をとらせたという事実によっても実証される。

カレッジを卒業する一年前に、彼の姉のマーガレットおよび彼の友達と一緒に、ドイツを訪問し、最初の一年間は、神学の勉強をするという計画をたてた。ドウリットルおよびフィッシャーの両教授の下で、彼は個人的に彼の友人とともに、ドイツ語の勉強を始めた。この頃、彼はアカデミックな仕事、日本人学生の個人教授、グラマー・スクールや日曜学校での正規の教授、学園誌ターグムの編集主幹の仕事、および教会やフラタニティや文芸協会のさまざまな会合で多忙を極めた。

(註23) Clipping: *Campus News of Rutgers College*, December. 14, 1923, G. C., RUL.

(註24) ダグラス・カレッジ (Douglass College) は、1918年 Mabel Smith Douglass 夫人の指導の下で、特に州の一般婦人たちの要求に基づいて、ラトガース大学の一学部として組織された。1955年4月16日に、その名称は、ダグラス夫人にちなんで、ダグラス・カレッジと変更した。現在学生数、約2,500人、常勤の教職員180人を有するアメリカで3番目に大きい女子大学となっている。

このような多忙の中にあっても、一週間に一度は、姉のマーガレットに、自分の近況を知らせる手紙を出すという、小さい時からの習慣を怠らなかつた。この事によって、彼は物を書くことに自信を持ち、彼の後年の著作活動の素養を身につけたのであった。このことは、特にマーガレットの、弟ウィリアムに対する細やかな配慮と愛情によるもので、弟のウィリアムの精神的・宗教的な修養と知的な成長を蔭ながら、乞ひ願っていたのであった。従って弟ウィリアムのカレッジにおけるすばらしい活躍ぶりに、我が事のように喜んだのは、正しく彼女であった。

ウィリアムは、マーガレットに書き送っているのであるが、彼がニュー・ブルンズウィックに住みついて以来、オランダ人的な忍耐と根づよい根気を習得して来た。「不撓不屈な忍耐力を持って、あせらずに、しかも、心ひそかにはぐくんで来た事業の達成のために幾年も喜んで待ちつ、すべての事柄を征服するということ」^(註25)は、グリフィスが一生涯の教訓として学び取った、ニュー・ブルンズウィックのオランダ人移住者の保有していた文化価値であった。

かくして、彼はいろいろな意味において、みのり豊かにカレッジを卒業したのであった。卒業の時には、ファイ・ベータ・カッパに推挙され、黄金の鍵を授与されたのを始め、スイダム賞(The Suydam Prizes)の英作文の部門に二つの金メダルを、自然科学の部門に一つの金メダルを獲得した。卒業式に列席した姉の喜びは、格別なものであった。

卒業式を終えるや否や、かねてから計画していたヨーロッパ旅行は実現された。彼と一緒にドイツ語を勉強していた友人は、都合により行かれなくなり、代わりに級友で、後に日本における唯一無二の同僚となり、かつ一生涯の親友となったクラークが、スイスで神学を学ぶために、グリフィスより一足先きに、ジュネーヴに旅立った。グリフィスは、また、ドイツで一年間神学を勉強する予程を変更して、オランダ改革派教会に対する義務感からニュー・ブルンズウィックの神学校の入学試験を受け、入学を許可された。結局、神学校入学の前、数カ月間、姉のマーガレットと共に、ヨーロッパを旅行することに決意したのであった。旅行は六月下旬の卒業式の直後から、十月初旬にかけての三カ月間にわたり、イングランドやスコットランドを振り出しに、アイルランド、オランダ、ベルギー、ドイツ、フランスと巡り歩き、パリでクラークに会い、マーガレットとクラークが、パリからジュネーヴに旅行する間、ウィリアムだけは、北イタリアを訪れ、ジュネーヴに戻って、再びマーガレットと共に、スイス、オーストリアを経て、イギリスを再訪問して、フィラデルフィアに帰着した。この旅行は、彼らの外国における経験を豊かなものにし、彼らの視野を広め、後の日本での長期の滞在生活の準備としても役立った。

旅行後は、グリフィスは、ニュー・ブルンズウィックの神学校に籍をおいて、キリスト教神学の真髄に触れた。彼は Woodridge 教授の教会史の講義に魅了され、ヘブライ語を通じて、旧約聖書の宝庫を探った。Joseph Frederick Berg 博士は、グリフィスを教理論の泥沼と深淵の中に導き入れようとした時に、グリフィスは、ひどくためらった。その教理論は、彼にとっては、

(註25) Letter from W. E. Griffis to M. C. Griffis, Nov. 17, 1868. G. C., RUL.

余りにも奥深かった。

「……魂の斗争の中であって、私は偉大なるものに向って、『主よ救い給え、さもなくば、我死す。』と心底から叫んだ。私は神の偉大な広い世界の中に出て行き、神の他の御子たちに出会い、かつ、海洋や日本での孤独の中であって、大きな岩、即ち、イエス・キリストを見出すために、私自身で、何らかの思考をなすことを、神の御声として歓迎したのであった。^(註26)」

神学校に通学する傍ら、ニュー・ヨーク市の九番街三十八番地にある、ノックス記念教会(Knox Memorial Church)で説教することを依頼され、広く読み、記録し、学び取り、内面的に消化し、かつ十分に信じていることを、誠意をこめて、説教するように努めた。彼は常に、彼自身の信念の領域内に留まった。

その外、ラトガース大学の地質学の実験室で、クック博士の下で、ニュー・ジャージー州地質測量に関する研究に従事し、それによって、後にマスター・オブ・アーツの学位を取得することになる。また、ラトガース・グラマー・スクールでは、引続き教鞭をとっており、文字通り、研究、説教、教授で忙しかった。

1870年9月6日、彼はレイリー教授から、次のような事を知らせる手紙を受け取った。

「キャムベル博士が、今ちょうど、私に次のような要求を含んだ手紙を見してくれました。独身の若い男子で、牧師でない人で、日本へ行って自然科学を教え、一般に教育活動を組織化する人を望む。時期は三年、給料は2,400ドル、家および馬付き。私は君を引き止めようと望むことは利己的であると思うし、君の代りになることは、私にとって困難であるけれども、しかし、それは若い人にとって、有益性、金銭および進歩という点で、極めて魅力的な事なので、私は、君がもし、それを望めば、君に要求せざるを得ない気持です。彼らは、優れて敬虔な気持に富んだ人を望んでおり、何事も引受けたことに対して、熱心な人物を望んでいます。もし、君がそのポストを望むならば、私に知らせて下さい。そうすれば、私は君の名前を提示し、かつ君に詳報を送るでしょう。金銭の面では、君は三年間に、ほとんど六千ドルを持ち帰ることができると思います。

敬具

D. T. レイリー^(註27)

キャムベルがレイリーに示した手紙は、ジョン・フェリスが、当時、横浜に居たフェルベックから依頼状を受け取った後、フェリスによって恐らく提示されたものであろう。1870年7月21日のフェルベックの手紙によると要求された内容は、日本の奥地、越前で、主として化学および物理学を教える若い人で、給料は年額2,400ドル、無償で家屋および馬を給付し、赴任旅費は、アメリカから横浜までは400ドルで、横浜から越前までの費用は、日本到着後支払われ、契約はフ

(註26) W. E. Griffis: *Sunny Memories of three Pastorates*, p. 8

(註27) Letter from D. T. Reiley to W. E. Griffis, Sept, 6. 1870., W. E. Griffis, Fukui Scrap Book of 1871, G. C., RUL.

(註28) Letter from G. F. Verbeck to J. M. Ferris, Secretary of Foreign Mission, July 21, 1870, Box 747, 3. N. B. T. S.

エルベックを通じてなされ、三年期限の雇傭になるということであった。^(註28)

これらの事実から、フェルベックが、日本人留学生のアメリカ派遣の労をとるのみならず、日本政府のために、外国人お雇い教師の選別、紹介、斡旋および契約関係の仕事にも重要な役割を演じていたことが知られる。

フェルベックは、先のフェリス宛の手紙の中で、更に次のように述べている。

「……無償の馬および家を給付されれば、用心深い、若い独身者なら、一年に800ドルで十分に生活できるでしょう。……若い教師は、頭の良い（普通の言葉を用いれば）、親切心があり、彼の専門分野、一般的には、特に化学において、十分に訓練され、十分に自立心のある、特に確固たる、また、実践的な、敬虔な気持を持った人であるべきでしょう。この国では、誘惑は実に恐ろしいものであり、家庭にあって鉄の如く堅固であった人でも、多くの人は墮落しております。事実、牧師や宣教師以外には、墮落しなかった人は、殆んど無い有様です。」^(註29)

グリフィスは、最初、この招聘を受け容れることを躊躇して、それを断わった。1870年9月26日付けの、姉のマーガレット宛の手紙の中で、彼は、「最初、僕に勧められた時、僕は単に、それは金と快楽のみを求めて、受け容れることになってしまうだろうと云う理由で、また、僕の仕事はこの地にあるように思われ、更に、E. G. J. (Ellen G. Jonson で、彼の恋人) も、そのことを確認していたので、僕は彼女のことを先に考え、『ノー』と答えました。」と述べている。^(註30) また、日本へ行くことについて、保険会社とかかわり合ったところ、日本のような未開国へ行くのには、余程の高額の保険金の払いこみをしなければならないと云われ、とり合わなかった。確かに、「少なくとも、条約上の制限を越えて、その当時の不穏な日本へ行くという考えは、敢えて中央アフリカや永遠に氷で閉ざされた地域に分け入るような気持であった。」^(註31)

その後、まもなく、彼は級友ブリュインと、その父に会い、彼らの宅で丸一晚議論をし、日本に行くことは義務であり、ぜひ行くことをしきりに勧められた。また外国伝道局でも、フェリスに、日本へ行くことは、神に対しても、教会にとっても、アメリカや日本にとっても、彼の義務であると説得された。彼はまた、キャムベル総長やレイリー教授とも相談したところ、彼らは異口同音に、「行け」としきりに勧めたのであった。特にキャムベルの忠告は、他の20人の忠告にも匹敵するだけの説得力と価値を持っていた。彼が親しくしていた日本人学生も、一致して日本へ行くように勧めた。最後に、彼は彼の部屋で、神学校の教授との相談会を催した。バーグ博士は、即座に、それは悪魔の誘惑であり、彼にその考えを押し止まるよう忠告した。しかしながら、他の教授たちは、その考えを高く評価し、それはグリフィスにとって、また、彼が生活の道を立てる根拠としても、輝かしい機会であると述べている。ウッドリッジ教授は、神学の書物を携行し、勉強し、かつ彼の地で僧職を受けよと忠告した。^(註32)

(註29) Letter from G. F. Verbeck to J. M. Ferris, Loc. cit.

(註30) Letter from W. E. Griffis to M. C. Griffis, Sept. 26, 1870, G. C., RUL.

(註31) W. E. Griffis: *Verbeck of Japan*, F. H. Revell Company, 1900 p. 217.

(註32) Letter from W. E. Griffis to M. C. Griffis, Sept. 26, 1870, G. C., RUL.

かくして、彼は快樂とか、物珍らしさとか云った理由からでなく、神に対する義務を遂行するために日本へ行くのだという明白な信念を抱くようになった。彼は次のように決心をしている。

「……僕は、彼の地で勉強でき、僧職を受けることができます。そして神が欲すれば、僕は彼の地に滞在する予程の期間よりも、一年だけ遅く、母国に戻ることができます。すばらしい機会や、文化や、旅行や、良い気候に恵まれている外に、殿様の特別な保護の下にあって、私は単に、神学について勉強できるだけでなく、書物を書く材料を集めることができます。僕は家^(註33)にあっては、家族を養なうことができ、少なくとも、家賃が払え、また、床にはじゅうたんも敷くことができ、立派な家も借りることができます。……」

この手紙の中に、彼の真の意図が簡潔に述べられている。彼の第一の主要な目的は、神からの招聘の故に、日本へ行くのであり、義務として、彼の地で福音を説き、彼の地で僧職を受けることであった。彼の第二の目的は、未知の世界を観察し、題材を集め、論文や書物を書くことによって、アメリカへ日本文化を紹介することであった。即ち、彼は、日本人を教えることによって日本人と接触し、それらの観察を通して日本文化を知ることの必要性を感じた。第三の目的は、知的にも、物質的にも、精神的にも、将来、望ましい生活が送れるようにすることであった。

1870年10月1日に、彼はニュー・ヨークの外国伝道局のフェリスの所に行き、日本へ行くことに快よく同意した。それから早速、帰りに書店に立ち寄って、J. J. Hoffman の「日本文法」(A. Japanese Grammar, Leiden, 1868, 348 pp.) を買い求め、彼の日本人の友人達を相手に、日本語の勉強を始めたのであった。彼の友人、ロバート・C・プリュインは、彼に渡航の費用^(註34)を含めて、すべて必要なお金約800ドルを彼に前貸しすることを申し出た。彼の友人たちの、こういった親切と援助のお蔭で、彼は日本への長期旅行の準備をすることができた。

ちょうど、彼の日本への出発前に、フェルベックの紹介で、外国伝道局のフェリスの世話で数十人の日本人学生や市民たちが、ニュー・ブルンズウィックの地を訪れ、グリフィスと会っている。永井五百介の変名で来た吉田清成は、1869年5月4日に、グリフィスを訪問しており、1870年9月2日に、旭小太郎および竜小次郎の変名で来た岩倉具実の二人の息子、次男の具定および三男の具経、薩摩藩よりイギリス留学を命ぜられ、一年当地に滞在した後、ニュー・ヨーク州のエリー湖の近くに身売りされたのを脱走して、ニュー・ブルンズウィックにやって来た杉浦弘蔵の変名を持つ畠山義成らが、グリフィスを訪れており、個人的にあるいは、ラトガース・グラマー・スクールで、英語、ラテン語、ギリシャ語や他の諸学科目の指導を、グリフィスより受けている。勝海舟の息子、勝小鹿は、早くから高橋是清とともに、アメリカに渡ったようであるが、直接にフェルベックと関係があったか、どうかは定かでないが、フェリスとは多少関係があり、1869年には、すでに、ニュー・ブルンズウィックにやって来て、グラマー・スクールで学んでいる。グリフィスが訪日することについて、父の勝安芳に報じた手紙がある。1870年9月に高木三

(註33) Letter from W. E. Griffis to M. C. Griffis, Loc. cit.

(註34) Letter from W. E. Griffis to M. C. Griffis, Oct. 3., 1870 G. C., RUL

郎も、グリフィス家を訪れて、一泊している。グリフィスが、旅立つ直前に、明治天皇の従兄弟である、華頂宮殿下一行が、フェルベックの紹介で、フェリス博士を訪問され、グリフィスは殿下一行を、フィラデルフィアの彼の自宅に招いて、一家でもてなしをしている。1870年11月2日より、手島精一がグリフィス家に寄宿し始め、ウィリアムの留守中は、マーガレットから、英語、化学および物理の手ほどきを受けることになった。このようにニュー・ブルンズウィックの地は、1870年代に、日本人留学生のメッカとなった。

こうした日本との文化交流の端緒にグリフィスは、いよいよ日本に向け出発することになり、出発前に、彼は旧知の牧師チャムバースを訪れ、彼の祝福を受けるべく、いとまごいをするつもりであった。ところが、彼は次のように書いて、失望の気持を表わしている。

「……心から祝福を受けるかわりに、彼は私を失望させるようにしたので、まことに驚ろいた。彼は、ふさぎこんで、未知の異教徒が、無数に居ることについて語り、私がなし得ることは、単なるバケツの中の一滴にすぎないといわれた。それにもかかわらず、神の恩寵によって、私はその一滴をして、語らしめようと思った。そして、私は人間がなし得ないことを、神がなすだろうということを感じた。」
(註35)

このように一滴をして語らしめると云う確固たる信念と、確固たる啓蒙宣教の精神を以って、日本の奥地へ向け旅立った。時は、1870年11月13日、グリフィスは、彼のすべての家族や友人に別れを告げ、家族の誰一人、強く彼の日本行きを反対した者は居なかった。彼の兄、モントゴメリーに、パーケスバーグまで同伴、見送りを受けながら、新大陸横断鉄道で、サンフランシスコに向った。
(つづく)

(註35) W. E. Griffis: *John Chambers*, p. 133.